

雲門十二時偈に関する一考察

永井 政之

雲門文偈（八六四—九四九）の語録を大成した『雲門匡真禪師広録』（以下「広録」）三巻の成立展開増補等の問題に関しては、すでに曹洞宗宗学研究所の刊行になる『宗学研究』第十三号において弱干の私見を述べてみたのであるが、それによれば雲門の語録は、没後さほどの期間を経ずして、門人守堅（守賢？）によつて編集され、少なくとも一〇七六年に至つて円覚宗演によつて校勘される時点では、すでに現行の「広録」の如き、大部のものになつていたと思われる。しかるに一一〇八年に刊行された睦庵善卿による『祖庭事苑』の雲門の語録への註釈を検訂してみると、善卿のみていた雲門の語録が、はたして宗演校勘の「広録」であつたかどうかという疑問——すなわち、時代的には疑いもなく、宗演校勘の「広録」をみていたはずであるが、しかしそれは、宗演校勘「広録」とは別の雲門の語録、あるいはそれは守堅編集になる雲門の語録であつたか——も生じる。そこで、この小論では、宗演の校勘になる以前の雲門の語録と、『祖堂集』巻十一の雲門の語との関係について考えてみよう。

すなわち、すでに論じたように、九五八年に成立した、南漢集賢殿学士・雷岳による『雲門山光泰禪院故匡真大師実性碑』（常盤大定『支那仏教史蹟記念集評解』所収）にあつて「別有言句。録行於

世」とする点から考えてみても、すでにこの時点にあつて、雲門の語録とされるものが成立していたことが知りうるのであり、このように考えてみた場合、守堅編集になる雲門の語録と、九五二年に江南の地で成立した『祖堂集』とは、いつたいいかなる関係にあるのであろうか。『祖堂集』に関しては、すでに柳田聖山氏による綿密なる研究の成果が存するので今は論じないが、その巻十一にあつては「雲門和尚。嗣雲峯」として、雲門の語を収録しているのである。がしかし、ここで記す雲門の語が、現行の「広録」に収されているそれとは、大分相違していることに注意しなくてはならない。いつたい『祖堂集』の撰者が、いかなる態度のもとに雲門の語の採録をなしたかは不明であるが、ただ宗演による「広録」の校勘が、当時大きく展開していつた雲門宗祖としての雲門の立場を意識したであろうと推測されるに比して『祖堂集』の据えた雲門像が、たんに雪峰派下の一禪者としての雲門像に近似しているとは考えられぬであらうか。事実『祖堂集』に収される雲門の語は、他の祖師のそれと比した場合、特に多いとは言えぬし、またその著語も五と、雪峰派下の人々のそれと比すれば多いとは言えない。しかも「実性碑」では、

後雪峰遷化。學徒乃問峰。佛法付誰。峰曰。遇松偃處住。學徒莫識其機。偃者蓋師名也。

として、雪峰の資としての雲門を強調するのであり、それらが逆に、雪峰派下での雲門への評価を暗示していると言えるであろう。他の祖師の語に対する著語も五と、祖堂集で著語をなす人々のそれと比すれば多いとは言えない。

それが逆に、素朴な形で雲門像を記すと言えるであろう。

さて『祖堂集』では、まず雲門の略伝を記し、ついでその語を収めるのであるが、そこでは問答商量八・上堂語一・十二時偈・宗脉頌を記している。上堂語一は「広録」の記載と重複するが、問答商量のうち注意を払うべきものを列挙すると次の如くなるであろう。

(1) 問。如何是透法身之句。師云。看山。(廣録では「日裏看山」とする)

(2) 問。什麼處來。對云。西天來。師云。作什麼來。對云。教化唐土衆生。師云。欺我唐土衆生。却問大眾。還會麼。對云。

不會。師打桂云。打爾箇兩重敗闕。(師良久。僧問。何異釋迦當時。師云。大眾立久。快禮三拜)(一)内は「傳灯録」でも記される。

(3) 問。如何是禪。師云。露柱吞蝦蟇。(僧云。如何舉唱。則不負於來機。師云。道什麼。僧云。還可來意也無。師云。且款款)(一)内は「廣録」でも記される。

(4) 問師問僧。訪方行來道。我知有且與我拈二千大千世界。向眼睫上著。學人應諾。師云。錢唐去國爲什摩三千里。

以上の四の問答について、その一を一を詳細にはしないが、しかし雲門の語録の時代的な変遷を考える上での一助になるであろう。

次には「十二時偈」の存在について考えてみる。半夜子より人定亥に至る十二時に宗旨あるいは坐禪の用心を説くものは、歴史的にも他にも多くの例を見出しうるものであるから、特に雲門独自のものであるとは断言し難いが、ただここで注意しなくてはならないのは『祖堂集』で記す「十二時偈」と「広録」で記す「十二時歌」との内容が、全く異なっていることである。しかも『祖庭事苑』による雲門の語録への註釈による限り、陸庵善卿のみた雲門の語録には

「歌」が収録されていたと思われるのであり、少なくとも宗演校勘「広録」の時点には、すでに「歌」が世に流通していたことは確実である。いつたい、雲門に「偈」と「歌」の二種のもものが最初から存したのかどうか、また「偈」が『祖堂集』独自のもので、他に知られることがなかったのかという疑問が生じるのである。しかし例えば、前出の雷岳の「実性碑」では、雲門の略伝を記すうちに、師遂入閩。纔登象骨。直奮鵬程。因造雪峯會。三禮欲施。雪峯乃云。何得到諸麼。師不移絲髮。重印全機。雖等截流。還同戴角。繇是學徒千餘。凡莫聖審。

としているのは、わずかの字句の異なるのを除けば、『祖堂集』のそれと全く一致するのである。つまり「実性碑」の記事は「祖堂集」のそれを全く引用しているのであるから、その意味からすれば、雷岳をはじめとする南漢朝の人々―雲門の法嗣を含めて―には「祖堂集」の記事をみる機会に恵まれた人も必ずやあつたに相違ない。これらの人々が『祖堂集』の記す雲門像をどのように捉えていたかという点は不明であるが、しかし「偈」が「広録」の中に収録されぬ点、あるいは宗脉頌をはじめとする『祖堂集』の記事が、全く無視されている点を考慮するなら、それが歓迎をもつてむかえられたとは言い難いものではあるまいか。

以上述べきたつた如く、『祖堂集』の記事は「広録」とは異なる、すなわち、『祖堂集』の記す雲門像は、「広録」に比して、より素朴な形をとつたものと言えよう。以上簡単であるが『祖堂集』の雲門の語について考えてみたのであり、不備の点は別の機会に述べたい。